The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

蘭渓道隆の遺偈について

舘　隆　志

本論は蘭渓道隆（一二一三―一二七八）の遺偈の伝来と内容を確認するものである。[1] まず、その伝来を伝記史料によって確認してみたい。道隆の伝記史料の中で成立が最も古いのは虎関師練（一二七八―一三四六）が元亨二年（一三二二）に撰述した『元亨釈書』巻六「釈道隆」に収録された伝記であるが（以下『釈書』）、これには道隆の遺偈は収録されていない。その後、『釈書』所収の伝記に基づき、中世には「建長興国禅寺碑文」と「日本建長開山大覚禅師蘭渓和尚行状」（『禅林諸祖行状』五）が、江戸時代の延宝四年（一六七五）には高泉性激（一六三三―一六九五）の『東渡諸祖伝』巻上所収の道隆の伝記が撰述されるが、共に遺偈は収録されていない。

しかしながら、卍元師蛮（一六二四―一七一〇）が延宝六年（一六七八）に撰述し宝永三年（一七〇七）に刊行された『延宝伝灯録』巻三（以下、『延宝』）や、宝永四年に刊行された『本朝高僧伝』巻十九（以下、『本朝』）から遺偈が収録されるようになる。したがって、まとまった伝記史料の中では『延宝』が遺偈の初出ということになる。

建長寺関係の史料として、道隆の遺偈が一般的に知られるようになるのは、道隆の霊骨を納めた霊骨器が元禄二年（一六八九）に「石卵」の中から発見され、ここに道隆の遺偈が刻まれていたからである。この霊骨器は発見後、「石卵」に戻されたため現在はその姿を見ることはできないが、銘文が、建長寺開山堂に現存する木板の表書に、

開山大覚禅師石卵之中銀製霊骨器銘之写。

開山和尚霊塔。

辞世云、

用翳睛術、三十余年、打飜筋斗、地転天旋。

右、蓋上彫刻之。

大宋西蜀涪州冉氏、師諱道隆、自号蘭渓。世寿六十六、夏臘五十。丙午来本朝、化導三十三年。弘安改元戊寅七月二十四日、未尅坐化。

弘安二年己卯七月廿四日安塔。

右、八角方彫刻之。

骨器　八角四方、高八寸、横七寸三分。

印度學佛教學研究第六十巻第一号　平成二十三年十二月

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

以白銀製之。
石卵　高三尺六寸、横二尺九寸五分。

と刻まれている（以下、「霊骨器銘之写」）。さらに、元禄二年（一六八九）二月に祖堂（開山堂）を再興した際、もとの場所が狭いことから「石卵」を一尺程後地に移したが、その際に「石卵」の中から霊骨器が発見された経緯等が裏面に刻まれている。

この内容を元禄六年（一六九三）に、曹洞宗の梅峰竺信（一六三三―一七〇七）が『大覚禅師拾遺録』の中に収録して刊行した。しかし、『拾遺録』は『延宝』よりも後に刊行されている。そのため、師蛮が『拾遺録』の閲覧後に、遺偈を付加した可能性と、師蛮は霊骨器発見より前にすでに遺偈を知っていた可能性が考えられる。『延宝』には法臘に関する記事は存しないにも拘わらず、『本朝』には『拾遺録』に基づくと考えられる「坐夏五十」との記述があるため、『延宝』は『拾遺録』に基づかない可能性も考慮されなければなるまい。師蛮は何に基づいて道隆の遺偈を知り得た可能性が考えられるか。

道隆の遺偈を収録するものを探してみると、盛時の鎌倉五山の様子を記したと考えられている『鎌倉五山記』には、

用翳晴術、六十六年、一鎚撃砕、大道坦然。

という遺偈が収録されており、別の遺偈が流通していた様子が伺える。また、享保八年（一七二三）頃の成立と考えられる『扶桑五山記』三「建長寺住持位次」には、

用翳晴術、三十三年、一槌打砕、大道坦然。

とある。そして、これらの遺偈の下二句は、『吾妻鏡』弘長三年（一二六三）十一月二十二日条に収録された北条時頼（一二二七―一二六三）の遺偈、

業鏡高懸、三十七年、一槌打砕（イ撃）、大道坦然。

の下二句に基づくと考えられ、長い時間が経過する中で、道隆の遺偈と、道隆に参じた時頼の遺偈が合わさっていったと考えられる。さらに、江戸時代の万治二年（一六五九）に撰述された選者不明の紀行日記『金兼藁』には、

用翳晴（睛）術、六十六年、一鎚打砕、大道坦然。

とあるので、この遺偈はある程度受け継がれていたことが知られる。しかし、これらの遺偈は『延宝』や『本朝』に記されたものとは異なることになる。

江戸時代に刊行された無住道暁（一二二六―一三一二）の『沙石集』には、道隆の遺偈は存在しているものの、これを略することが記されている。しかし、これは略本系と呼ばれる『沙石集』であり、広本系と呼ばれるものには、

蘭渓事
建長寺ノ道隆長老ハ、去弘安元年七月廿四日入滅。ソノ時剋ニ望テ大旦那、相州ノ許ヘ逞ラル。

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

伏望マクハ、檀那始終宗乗ノ外護トシテ、令二法久住一万幸。老僧風火相逼テ、不レ及二面別一恐惶。七月廿四日、道隆懇切申。法衣一領進二上太守一。

辞世頌

用二翳精術一、三十余年、打二飜筋斗一、地転天旋。

という記事が収録され、鎌倉期に道隆の遺偈が伝来していたらしいことが確認される。

金沢文庫所蔵『伝記勘文』には称名寺第二世釵阿（明忍房、一二六一―一三三八）自筆で鎌倉末期に書写された禅宗に関する紙背文書が収録されているが、そのうち『伝記勘文』前表紙裏には、

伏望、檀那始終外二護宗乗一、令二法久住一万幸。老僧風火相逼、不レ及二面別一、惶恐。道隆懇切申。法衣一頂進二上大宗一。

七月　日

用二翳精術一、三十余年、打二翻筋斗一、地転天旋。

七月　日　道隆　珍重

首座大衆

と記されている。『沙石集』広本系の記述とほぼ同じで、北条時宗（一二五一―一二八四）にあてた書簡であり、法衣一頂を進上したものと考えられる。「七月　日」とあり、日にちは明記されていない。遺偈にも「七月　日」とあることから、時宗宛の書簡を作成すると同時に、首座大衆に宛てた遺偈も記して作成していたのだろう。『釈書』には七月に入り「微疾」を示したとあるから、道隆は己の死期をある程度さとっていたことになる。そして、その間に、「山僧の遺訓」を記して、五つの遺誡を門弟に残したのであろう（『大覚禅師拾遺録』所収「大覚禅師遺誡五条」）。

道隆の示寂に際しての、時宗宛の書簡と遺偈が書写され、さらに書写されたものが『伝記勘文』前表紙裏と『沙石集』の記事と考えられる。また、前表紙裏も『沙石集』も「翳精」と表記していることから、もとは同一の出典である可能性が想定されるが、少なくとも鎌倉末期に道隆の遺偈が伝承されていたことが示されている。

それでは、なぜ『釈書』所収の道隆の伝記に、遺偈は収録されなかったのであろうか。道隆の伝記に付された師錬の賛文には、当時は道隆の行状は存在していなかったため、法嗣の約翁徳倹（一二四四―一三二〇）に行状の執筆を願い、後日、師錬に送られた行状を編集して収録したことが記されている。一方、約翁徳倹の語録『仏灯国師語録』巻下「小仏事」には、

円覚祖堂奉二安達磨大覚二祖師一。

迢迢十方離二西乾一、脱二賺孤筇一出二四川一。円覚謚来同二大覚一、刻レ舟記レ剣両茫然。共惟、円覚大覚両位祖師大和尚、少室単伝、扶桑始祖。入レ草求レ人、九年面壁、随レ方唱レ道、万里航レ波。用二迷子訣一、安二可祖心一、用二翳睛術一、瞎二衲僧眼一。所以道、仏々授レ手、

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

仏々道同、祖々伝レ心、灯々続レ燄。直得人間天上、了無二位次一安排。安レ牌云、者辺那辺、伏惟珍重。

とあって、道隆の遺偈の一句「用翳睛術」を意識していたらしいことが伺える。徳倹は道隆の遺偈を知っていたと考えるべきであろう。

道隆の示寂の情報は、遠く博多の聖福寺まで届けられた。無象静照（一二三四―一三〇六）の語録『無象和尚語録』巻上「聖福禅寺語録」には、

蘭渓和尚訃音至上堂。松源的伝孫、無明破家児、来占二福山頂一、斬新立二雄基一。故我建長第一世開山和尚蘭渓大禅師、窮二徹万法之根源一、敲二出千聖之骨髄一、三十余年弄二精魂一、謾把二金貂一続二狗尾一。頂門正眼自独瞎、和レ麩糶レ麺起二宗旨一。時節忽来縁化窮、打二翻筋斗一動二天地一。動二天地一、法梁折。優曇香尽落二秋風一、涙雨空淋恨不レ竭。

とあって、訃音が届いたその日の上堂では、明らかに「三十余年、打翻筋斗、地転天旋」を意識した上堂を行なっている。静照は道隆に長らく参じてから、入宋して石渓心月（？―一二五五）の法を嗣いでいる。また、帰国して後に、道隆が甲州や松島に下向すると、それに随侍していることから（『続群書類従』巻上所収「無象和尚行状記」）、かなり密接な師弟関係にあった。その静照に訃音と共に遺偈が届けられたのは、当然のことであったと言えるだろう。

したがって、道隆が七月二十四日の「未刻」に坐禅したまま姿で示寂し、遺偈が「首座大衆」に示され、その情報は各地で活躍する弟子のもとに届けられたと考えられる。道隆の遺偈は弟子の間で、広く知られていたと判断されるべきであろう。

そして、そのことは門下のみでなく鎌倉では広く知られたことであったと考えられる。大休正念（一二一五―一二八九）の語録『大休和尚語録』「大小仏事」には、

蘭渓大覚禅師入二寿福祖堂一

巨福山中旧主人、亀峰此日又分レ身、裂二開全主全賓句一、徳不レ孤兮必有レ隣。恭惟、寿峰第五世蘭渓大覚禅師、生縁巴蜀、道化扶桑。得二無明翳睛訣一、仏眼莫二之能弁一、用二東山暗号子一、禅衲莫二之能名一。泡影雖レ云二寂滅一、真儀爾如レ生。捧二位牌一云、諸人只今還見二大覚禅師真相一麽。（後略）

とあって、寿福寺の祖師堂に道隆を入牌した際にも「無明翳睛訣」と記している。無明とは、道隆の師である無明慧性のことを指し、師から受け継いだ翳睛術ほどの意味かと思われるが、いずれにしても正念も道隆の遺偈を意識していた可能性が高い。また、徳倹や正念が「翳睛」と記していることから、『沙石集』や『伝記勘文』前表紙裏に記された「翳精」は「翳睛」の書写間違いであった可能性が高い。

以上の考察結果から、道隆の遺偈は、

用翳睛術、三十余年、打翻筋斗、地転天旋。

が正しいものであったと考えられる。そのため、霊骨器に刻

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

まれている銘文は、極めて信憑性が高いと言える。

しかし、なぜ正しい遺偈が伝わっていたにも拘わらず、『釈書』に道隆の遺偈が収録されなかったのかは不明である。『釈書』は、遺偈が伝わっていても内容を収録していない例が存在する。師錬は徳倹の遺偈も収録していない。あるいは、道元の遺偈についても存在を記しつつも内容については触れていない。しかし、道隆や徳倹の例を見る限りにおいて、『釈書』に遺偈の内容が記されていないことは、遺偈の内容が伝わっていなかったことの証左とはならないことが判明する。また、『延宝』の遺偈は『沙石集』や『伝記勘文』前表紙裏とも異なることから、あるいは『延宝』の刊行に際して、新たに知られた遺偈のみを行状に付記した可能性も想定されなければならない。

茶毘に付された道隆の霊骨は、高八寸（約二四センチ）横七寸三分（約二二センチ）の白銀製の霊骨器に納められ、その霊骨器には道隆の簡略な伝記と、遺偈が刻まれたと考えられる。このことについて、『大休和尚語録』「大小仏事」の「西来庵安二奉釈迦宝座一」には、「茶毘設利（舎利）不レ計レ数、煙焔到処纍如レ珠。此土従来所二希有一、建二窣堵坡（卒塔婆）一而珍蔵。」とあり、道隆の「三周忌」に「窣堵坡（卒塔婆）」の中に舎利を珍蔵したことが記録されていることは、道隆が示寂して二年後の記事として注目されよう。したがって、建長寺所蔵「霊骨器銘之写」は、道隆の略伝を記す最古の史料である可能性が考えられ、その伝記を考察する上においても極めて重視されるべきものと言える。

次に、道隆の遺偈の内容を見てみたい。まず、これを読み下してみると、

翳睛の術を用いて、三十余年、筋斗を打飜し、地転じ天旋る。

となろう。「翳睛術」に関する考察は紙面の都合上省略するが、「翳睛術」とは、悟らせるために、悟りの最も肝要な核心を述べるのではなく、それを理解させるために核心を覆い隠しながら、自在に学人を接化することと考えられる（拙稿「蘭渓道隆の霊骨器と遺偈」『駒澤大学禅研究所年報』第二十三、二〇一一年）。そのため、この一句は道隆が自在に学人を接化したことを述べたものであろう。前述の『大休和尚語録』には「無明翳睛訣」とあるが、『無明和尚語録』には「翳睛」の語はない。しかし、この記事に基づけば、無明慧性やその門下の人々も「翳睛術」を用いていたことになろう。一方、かつて道隆が学んだ癡絶道冲（一一六九―一二五〇）は『癡絶和尚語録』巻下「龕銘」で「所レ聚兄弟、不レ可レ謂レ無、只是用二翳睛法一者少。苦哉、吾宗喪矣」と述べており、道冲の「龕銘」を意識していた可能性も考えられる。

次に「三十余年」とは、これは道隆が日本に来てからの年数を指すと考えられる。通常、遺偈に用いられるのは世寿で

NII-Electronic Library Service

The Japanese Association of Indian and Buddhist Studies

あるから、これは他には見られない遺偈の句になる。すなわち、道隆にとっては、日本での布教こそが僧侶としての生涯であったことを自述したものであり、長年日本で布教を続けた道隆にもっとも相応しい句であったと言える。

また、「筋斗を打飜し」とは、もんどりをうつこと、宙返りをすることであり、「地転じ天旋る」とは、天地がぐるぐる動くことだろう。静照は「天地動く」と記しているから、似たような意味でとらえていたことが知られる。

そこで、道隆の遺偈を試訳してみると、

私は日本に来て翳睛の術を用いながらも、三十数年が経過した。さて、もんどりをうって天地をひっくり返してあの世に旅だってやろう。

ほどの意味となろうか。道隆の日本における布教の様子が伝わってくるようである。

おわりに

以上、道隆の遺偈の歴史的な伝来と、その内容について考察してきたが、その結果として判明したことをいくつか述べてみたい。まず、道隆の遺偈は鎌倉期には正確に伝来され、広く知られていた。しかし、最古の道隆の伝記史料『釈書』には収録されず、『延宝』までは、伝記史料には収録されなかった。したがって、伝記史料としては遺偈が収録されていない方が、より成立が古いことになる。また、長い時間が経過する中で、遺偈が正確に伝承されない事態が起こる。しかし、道隆の正しい遺偈は霊骨器に刻まれて石卵に収蔵され、江戸時代に発見されることとなったのである。

原本の成立が鎌倉期の史料として、唯一正確に遺偈を残していた「霊骨器銘之写」は信憑性の高い史料と言え、霊骨器発見の記事と共に、霊骨器に刻まれた内容は、伝承された遺偈が道隆のものであることを証明するとともに、今後の蘭渓道隆の研究において重視される必要があろう。

1　遺偈の問題を広く扱ったものとして、柳田聖山『禅の遺偈』（潮文社、一九七三年）、『遺偈・遺誡―迷いを超えた名僧最期のことば―』（大法輪閣、一九九八年）があり、鎌倉期の遺偈を扱ったものに、菅原昭英「鎌倉時代の遺偈について―円爾にいたる臨終作法の系譜―」（『鎌倉時代文化伝播の研究』吉川弘文館、一九九三年、七五―一一四頁）などが存するが、いずれの研究においても道隆の遺偈について扱われていない。これは、これまで道隆の遺偈が史学的に証明されていなかったためと考えられる。

〈キーワード〉　建長寺、鎌倉、無縫塔、西来庵、骨蔵器

（駒澤大学非常勤講師）

NII-Electronic Library Service